

IAMAS シラバス

博士後期課程(博士課程)

情報科学芸術大学院大学

2026年4月

研究基礎科目

メディア表現研究 I

担当: 赤羽亨、ジダノーワ・アリーナ、大久保美紀、菅実花、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、鈴木悦久、立石祥子、萩原健一、飛谷謙介、平林真実、松井茂、山田晃嗣			
単位: 2単位	履修対象: 1年	履修区分: 必修	授業形態: 講義
学期: 前期	実施方法: オンライン	教室: W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士課程における研究は、学生自らが研究課題を設定し進めていく際に、メディア表現分野に求められる研究倫理に基づいたテーマと計画が必須である。論文例や研究方法、評価方法等を示しながら、論文作成に求められる研究の枠組みや解析技法をはじめとして、調査・研究手法全体を俯瞰する。特にメディア表現という視点で広く社会や世界を見つめ「問い」を立て、その問いへのアプローチ手法を検討し、結論へと計画的に描く必要がある。本授業では、博士後期課程初期段階における研究の基礎的なあり方に対する概論であり、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するための教育課程やスケジュールの確認を起点として、自身の研究テーマを確認し、研究を進めるための方法構築の全般の修得を目標とします。

授業の概要

博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、各自のテーマに基づいて進められる研究視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養い、ならびに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を理解する。また、論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を修得する。なお、領域横断的に相互に深く関連するものであることから、多様な事例の修学を狙い教員がオムニバス方式で開講する。

授業計画

- 第1回ガイダンスと研究倫理(松井茂)
 - 博士課程の教育課程と研究スケジュールを確認する。また、研究を進めるうえで必要となる博士課程のコンプライアンスや研究倫理、行動規範を理解する。
- 第2回メディア表現研究のねらい(鈴木宣也)
 - テーマに基づくメディア表現研究をより明確にイメージするため、研究の本質である「問い」と領域横断性とその再組織化について理解する。
- 第3回～第5回メディア表現研究と理論化の概観(大久保美紀・山田晃嗣)
 - メディア表現研究に関する仮説の設定と、具体的な実践を基にした表現手法の検証など、表現研究と理論研究の関連のプロセスの過程で行われる、自らの研究の概観をまとめ、理論に裏付けされた表現について考察する。

- 第6回～第8回研究・分析方法の概観(平林真実・松井茂)
 - 博士課程に求められる研究工程を具体的に想定するため、テーマの設定、仮説設定、事例・文献調査、実地調査、分析方法、評価方法を理解したうえで、自分がどのような工程で研究を進めるべきか考察する。
- 【第9回～第15回】は、メディア表現に関する領域横断について、各担当が多様な研究事例を示し、メディア表現研究について考察する。
 - 第9回メディア表現に関する領域横断(1)メディア・アート(鈴木悦久、松井茂)
 - 第10回メディア表現に関する領域横断(2)イノベーション・マネジメント(小林茂、飛谷謙介)
 - 第11回メディア表現に関する領域横断(3)インタラクション・デザイン(鈴木宣也、赤羽亨)
 - 第12回メディア表現に関する領域横断(4)コミュニケーション・システム(小林孝浩、平林真実)
 - 第13回メディア表現に関する領域横断(5)イメージング・メディア(菅実花、萩原健一)
 - 第14回メディア表現に関する領域横断(6)メディア・コミュニケーション(立石祥子、山田晃嗣)
 - 第15回メディア表現に関する領域横断(7)アート・セオリー(ジダノーワ・アリーナ、大久保美紀)

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポートなど、総合的に判断する。

メディア表現研究Ⅱ

担当: 赤羽亨、ジダノーワ・アリーナ、大久保美紀、菅実花、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、鈴木悦久、立石祥子、萩原健一、飛谷謙介、平林真実、松井茂、山田晃嗣			
単位: 2単位	履修対象: 1年	履修区分: 必修	授業形態: 演習
学期: 後期	実施方法: オンライン	教室: W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士後期課程の研究において、各自の研究を理論的に思考し客観的に文章化するために、本授業では博士後期課程初期段階における研究の進め方の理解を目的とする。また、メディア表現に対する深い洞察と新たな知見を獲得するため、自身の研究テーマとプロセスについて演習を通じて確認し、研究を進めるための方法構築全般の修得を目標とする。そこで(1)研究テーマと論文との関連づけ、(2)各自のテーマに基づく理論的な研究方法についての調査、(3)論文の構成についての検討、といった流れを通じ、領域横断的視点を重視しつつ、論文執筆に向けての基盤を作ることを目標とする。

授業の概要

博士前期課程から研究能力をさらに発展させるため、「メディア表現研究Ⅰ」にて修得した研究の基本的な進め方からはじめ、各自のテーマに基づく研究の視点から、さらに学際的・国際的な視点に立った研究活動を自立して推進できる研究遂行力を養う。ならびに質の高いメディア表現へ向けた研究方法を演習を通じて理解する。メディア表現の論文作成に求められる手順を理解し、文献検索や研究事例の収集、仮説設定と理論検証、考察手法等、論文作成方法を演習を通じて修得する。

授業計画

- 第1回ガイダンス
- 第2回～第3回テーマの探求・発見および背景の調査
- 第4回～第5回先行研究と研究分析
- 第6回～第7回研究テーマと論文計画の提出と議論
- 第8回～第10回研究調査・分析方法、表現手法の選択と考察
- 第11回～第13回理論・体系化と実践計画
- 第14回～第15回論文構成と研究方法

各自の研究に即した教員の研究テーマを選択し履修する。各教員の研究テーマは次のとおり。

(赤羽亨)

インタラクショナルデザインに焦点をあて、デザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイプング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得やデジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイプング手法など、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクションの記録について教授する。

(ジダノーワ・アリーナ)

想起と忘却の研究を背景として、インタビュー等のリサーチから得られる個人の語りをもとに、記憶の形成に関わる文化的・社会的背景を考察する。リサーチと制作の往還を通して、映像・インスタレーション等の芸術実践と理論的考察を往還する実践研究を取り上げ、問いの生成と研究方法の構築、ならびに理論化のプロセスについて教授する。

(大久保美紀)

近代以降の主体中心的世界認識を批判的に検討し、エコロジー・生命論・技術哲学、人工知能研究、新しい人類学の知見を横断して、技術を広義の概念として再定義する。現代哲学と科学・メディア表現を架橋し、新たな世界認識の枠組みを探究する。

(菅実花)

メディア技術の進歩により変遷する表象文化と社会に焦点を当て、近代以降の芸術史をふまえて、視覚表現を対象にその背景にある歴史的・社会的文脈を掘り下げるとともに、個々の制作者・鑑賞者の体験を相対化し、「問い」としてのアートの実践を探求する方法論を教授する。

(小林孝浩)

情報システムの継続的な発展がもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、情報システム工学に専門の軸足を置き、それらの応用研究に関して教授する。

(小林茂)

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、経営学等の知見を参照しつつアイデアの創出から実装に至るまでの課題と手法について学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティストなど限られた資源で実行した事例を詳細に分析し実践に向けて教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの主軸に捉え、ビジュアルリテラシー(創造)やインタラクショナルデザイン(設計)、プロトタイプング(実践)などを含むデザインプロセスに関する

発展研究について、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に教授する。

(鈴木悦久)

音や音楽におけるメディア技術がもたらす文化形成について、20世紀中盤から21世紀現在に至る社会の変容を視野に、学術・資本・聴衆といった社会的要素から分析し、多層的な枠組みとして捉え検証する。そのための実践的研究手法と社会的接続の方策を、持続的な文化基盤の構築を射程におき教授する。

(立石祥子)

テクノロジー、芸術、文化、都市、建築といった横断的な要素から構成される人びとの体験を一連の〈出来事〉として捉え、〈出来事〉の持つ形式に着目することで、複合メディア時代における複雑な体験を解体／分析し、統合／理論創出することを目指し、それを可能とするメディア論およびメディア研究の視座から思考するための理論と方法論を教授する。

(萩原健一)

新しい道具を手にする初学者が、その技法と出会い、身体化していく過程で生じる「発見」や「試行錯誤」を、イメージ生成の根源的なプロセスとして捉え直す。映像メディアの変容がもたらす人間の振る舞いや、身体的な知覚の再編成を、制作実践を通じて考察し、新たな問いを導き出すための具体的な方法について教授する。

(飛谷謙介)

機械学習をはじめとする人工知能に関する諸技術を新たなメディア技術として捉え、それらの数理的な側面だけでなく、技術の進展と共に社会に形成されうる価値観について検討する。そのため本講義では、数理統計学の歴史を紐解き、諸技術に通底する確率的・統計的な感覚、およびその社会的展開、特に表現領域との接点について教授する。

(平林真実)

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムを例に、実時間性を担保した実践的な実現手法を教授する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディアを介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

(山田晃嗣)

安全・安心なネットワークというインフラと、情報の価値を高める分析手法を用いて、各ユーザに個別対応するための一手段として情報技術を考える。そして、それらをどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉え、情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、レポートなど、総合的に判断する。

知的財産権特論

担当: 狩野幹人(非常勤)			
単位: 1単位	履修対象: 1年2年3年	履修区分: 選択	授業形態: 講義
学期: 前期	実施方法: オンライン	教室: W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

広く知的財産権全般の知識を学び、研究・制作活動と知的財産との関連や、大学・企業における知的財産権の取得・活用について理解を深めることで、知的財産制度の基礎的及び専門的知識を習得すると共に、研究者、芸術家、実務家として知っておかなければならない注意点などを習得する。

授業の概要

知的財産権に関する基本的な考え方や国内外の法律・制度、研究・制作活動の成果である知的財産の意義、大学・企業での先進的な知的財産の活用事例等について講義する。また、身近な発明のアイデアに基づく特許創出や、先行技術調査を学ぶ。さらに、社会やイノベーションにおいて知的財産およびマネジメントの果たす役割、研究倫理と著作権、安全保障と知的財産について解説する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス／知的財産・知的財産権とは
- 第2回 イノベーションと知的財産・知的財産権
- 第3回 特許制度
- 第4回 意匠制度
- 第5回 商標制度
- 第6回 著作権制度
- 第7回 研究倫理と著作権
- 第8回 経済安全保障と知的財産・知的財産権

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

課題レポート提出およびその評価。

プロジェクト研究科目

プロジェクト研究 I

担当: 赤羽亨、大久保美紀、菅実花、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、鈴木悦久、飛谷謙介、萩原健一、平林真実、松井茂、山田晃嗣			
単位: 2単位	履修対象: 1年	履修区分: 必修	授業形態: 実習
学期: 後期	実施方法: オンライン	教室: W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースドラーニング(PBL)と研究を協調させた授業である。問題の抽象化や具体的活用、解析・設計のために欠かせない問題設定能力、問題解決能力、ディベート能力、統合力などの修得を目標とする。また、実践的な研究力の獲得と研究の効果的な活用を目指し、社会と生活にその意味と意義を記号接地させることを目指す。本授業では、社会と研究との多角的な接点を探る領域横断的なプロジェクトの企画化、プロジェクトを進めていくためのコミュニケーション力の獲得を目標とする。

授業の概要

学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースドラーニング(PBL)と研究を協調させた授業である。開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。領域横断的な視点から研究が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。社会と研究との多角的な接点を探るプロジェクトの企画力と、プロジェクトを進めていくためのコミュニケーション力の獲得を目指す。

授業計画

- 第1回ガイダンス
- 第2回～第4回研究テーマの設定、企画立案
- 第5回～第9回共同・共創・共有研究先の選定とプロセス
- 第10回～第14回プロジェクトの進行と進捗報告
- 第15回研究報告会(報告書の提出)

担当教員の研究テーマは次のとおり

(赤羽亨)

インタラクシオンデザインに焦点をあて、デザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイピング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得やデジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイピング手法など、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクシオンの記録について教授する。

(大久保美紀)

近代以降の主体中心的世界認識を批判的に検討し、エコロジー・生命論・技術哲学、人工知能研究、新しい人類学の知見を横断して、技術を広義の概念として再定義する。現代哲学と科学・メディア表現を架橋し、新たな世界認識の枠組みを探究する。

(菅実花)

メディア技術の進歩により変遷する表象文化と社会に焦点を当て、近代以降の芸術史をふまえて、視覚表現を対象にその背景にある歴史的・社会的文脈を掘り下げるとともに、個々の制作者・鑑賞者の体験を相対化し、「問い」としてのアートの実践を探求する方法論を教授する。

(小林孝浩)

情報システムの継続的な発展がもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、情報システム工学に専門の軸足を置き、それらの応用研究に関して教授する。

(小林茂)

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、経営学等の知見を参照しつつアイデアの創出から実装に至るまでの課題と手法について学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティストなど限られた資源で実行した事例を詳細に分析し実践に向けて教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの主軸に捉え、ビジュアルリテラシー(創造)やインタラクシオンデザイン(設計)、プロトタイピング(実践)などを含むデザインプロセスに関する発展研究について、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に教授する。

(鈴木悦久)

音や音楽におけるメディア技術がもたらす文化形成について、20世紀中盤から21世紀現在に至る社会の変容を視野に、学術・資本・聴衆といった社会的要素から分析し、多層的な枠組みとして捉え検証する。そのための実践的研究手法と社会的接続の方策を、持続的な文化基盤の構築を射程におき教授する。

(萩原健一)

新しい道具を手にする初学者が、その技法と出会い、身体化していく過程で生じる「発見」や「試行錯誤」を、イメージ生成の根源的なプロセスとして捉え直す。映像メディアの変容がもたらす人間の振る舞いや、身体的な知覚の再編成を、制作実践を通じて考察し、新たな問いを導き出すための具体的な方法について教授する。

(飛谷謙介)

機械学習をはじめとする人工知能に関する諸技術を新たなメディア技術として捉え、それらの数理的な側面だけでなく、技術の進展と併に社会に形成される価値観について検討する。そのため本講義では、数理統計学の歴史を紐解き、諸技術に通底する確率的・統計的な感覚、およびその社会的展開、特に表現領域との接点について教授する。

(平林真実)

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムを例に、実時間性を担保した実践的な実現手法を教授する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディアを介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

(山田晃嗣)

安全・安心なネットワークというインフラと、情報の価値を高める分析手法を用いて、各ユーザーに個別対応するための一手段として情報技術を考える。そして、それらをどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉え、情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、研究報告の発表など、総合的に判断する。

プロジェクト研究Ⅱ

担当:赤羽亨、大久保美紀、菅実花、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、鈴木悦久、飛谷謙介、萩原健一、平林真実、松井茂、山田晃嗣			
単位:2単位	履修対象:2年	履修区分:必修	授業形態:実習
学期:通年	実施方法:オンライン	教室:W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを企画立案し、実践しながら研究を進める、プロジェクトベースラーニング(PBL)と研究を協調させた授業である。問題の抽象化や具体化活用、解析・設計のために欠かせない問題設定能力、問題解決能力、ディベート能力、統合力などの修得を目標とする。また、実践的な研究力の獲得と研究の効果的な活用を目指し、社会と生活にその意味と意義を記号接地させることを目指す。本授業では、プロジェクトの遂行と議論を通じて領域横断力と実践力の獲得を目標とする。

授業の概要

学生が自らの研究テーマに対して、社会的な実践の場として、社会との接続を踏まえたプロジェクトを実践しながら、新たな表現拡張と理論化・体系化へつながる中心的科目として、博士論文作成に向けた実践的研究を展開する。開かれた活動の場の中で、相互に協働、交流・発信を図りながら、教育・研究を進める。領域横断的な視点から理論化・体系化が効果的に進められるよう、個々の専門性が異なる教員がチームで指導する。プロジェクトの遂行と議論を通じて領域横断力と実践力の獲得を目標とし、その成果をまとめることも含め実施する。

授業計画

- 第1回～第14回プロジェクトの進行と進捗報告
- 第15回研究報告会(報告書の提出)

担当教員の研究テーマは『プロジェクト研究Ⅰ』を参照のこと。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み、研究報告の発表など、総合的に判断する。

特別研究科目

メディア表現特別研究 I

担当: 赤羽亨、大久保美紀、菅実花、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、鈴木悦久、飛谷謙介、萩原健一、平林真実、松井茂、山田晃嗣			
単位: 2単位	履修対象: 1年	履修区分: 必修	授業形態: 演習
学期: 通年	実施方法: オンライン	教室: W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士論文・研究制作に関する指導をおこないながら、(1)研究テーマの設定・研究計画立案、(2)論文研究・年次制作の実施、および(3)報告書の提出、以上、博士論文に繋げる研究テーマの設定とその研究計画の立案を通し研究の方向を定め、本格的な研究に着手することを目標とする。

授業の概要

研究テーマ発表、年次制作・研究の実施と発表、報告書の提出から構成される。2年次の「メディア表現特別研究Ⅱ」へ向けた準備段階と位置づけられる。

1年次当初に、入学時に提出された研究計画に基づき主指導教員と副指導教員を配置し、その後、学生の研究テーマ案を踏まえて、明確な研究テーマ設定と研究計画の立案に関する指導を行う。立案された研究計画書については、「研究計画審査」と「倫理審査」における審査を通じて、適切な助言・指導を行う。また、「プロジェクト研究Ⅰ」へ向けた計画に関する指導を行う。

後期は、「メディア表現研究Ⅰ」における成果等を取り込みつつ、学生が、主指導教員、副指導教員らと定期的に研究・制作のテーマや意図、内容や手法に関する相談と進捗状況の報告を行いながら研究を進める。最終的に年次の論文研究・制作を完了し、「博士研究状況報告会」にて発表のうえで博士研究状況報告書を提出する。なお、主指導教員は、博士論文提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。

授業計画

- 第1回ガイダンス
- 第2回～第3回研究テーマ設定、研究計画立案指導
- 第4回～第7回研究テーマに基づく個別指導
- 第8回研究計画審査、倫理審査の準備

- 第9回～第14回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
- 第15回博士研究状況報告会(報告書の提出)

担当教員の研究テーマは次のとおり

(赤羽亨)

インタラクティブデザインに焦点をあて、デザインプロセスにおいて重要となる「プロトタイプング」に関連して、メディア表現技術の体系的な習得やデジタルファブリケーション技術を活用したプロトタイプング手法など、メディアテクノロジーを使った表現手法やインタラクティブの記録について教授する。

(大久保美紀)

近代以降の主体中心的世界認識を批判的に検討し、エコロジー・生命論・技術哲学、人工知能研究、新しい人類学の知見を横断して、技術を広義の概念として再定義する。現代哲学と科学・メディア表現を架橋し、新たな世界認識の枠組みを探究する。

(菅実花)

メディア技術の進歩により変遷する表象文化と社会に焦点を当て、近代以降の芸術史をふまえて、視覚表現を対象にその背景にある歴史的・社会的文脈を掘り下げるとともに、個々の制作者・鑑賞者の体験を相対化し、「問い」としてのアートの実践を探求する方法論を教授する。

(小林孝浩)

情報システムの継続的な発展がもたらす不可逆的な影響を省みつつ、現在の社会環境において技術の適正なあり方や技術に依存しすぎない人間や生活のあり方をテーマに、情報システム工学に専門の軸足を置き、それらの応用研究に関して教授する。

(小林茂)

まず、古典から最新の国際標準に至るまでイノベーションの定義がどのように変遷してきたか背景と共に学ぶ。次に、経営学等の知見を参照しつつアイデアの創出から実装に至るまでの課題と手法について学ぶ。その上で、中小企業、スタートアップ、メディアアーティストなど限られた資源で実行した事例を詳細に分析し実践に向けて教授する。

(鈴木宣也)

メディア技術とそれがもたらす影響をテーマの主軸に捉え、ビジュアルリテラシー(創造)やインタラクティブデザイン(設計)、プロトタイプング(実践)などを含むデザインプロセスに関する

発展研究について、情報メディアとデザインの可能性と課題をホリスティックな視点から俯瞰的に教授する。

(鈴木悦久)

音や音楽におけるメディア技術がもたらす文化形成について、20世紀中盤から21世紀現在に至る社会の変容を視野に、学術・資本・聴衆といった社会的要素から分析し、多層的な枠組みとして捉え検証する。そのための実践的研究手法と社会的接続の方策を、持続的な文化基盤の構築を射程におき教授する。

(萩原健一)

新しい道具を手にする初学者が、その技法と出会い、身体化していく過程で生じる「発見」や「試行錯誤」を、イメージ生成の根源的なプロセスとして捉え直す。映像メディアの変容がもたらす人間の振る舞いや、身体的な知覚の再編成を、制作実践を通じて考察し、新たな問いを導き出すための具体的な方法について教授する。

(飛谷謙介)

機械学習をはじめとする人工知能に関する諸技術を新たなメディア技術として捉え、それらの数理的な側面だけでなく、技術の進展と併に社会に形成される価値観について検討する。そのため本講義では、数理統計学の歴史を紐解き、諸技術に通底する確率的・統計的な感覚、およびその社会的展開、特に表現領域との接点について教授する。

(平林真実)

様々なメディアおよび時空間上で構成されたコミュニケーションを、機械学習等を用いた分析から、実世界インターフェイス、Webシステムを含む基盤に対し、多様な状況に適したコミュニケーションを拡張するシステムを例に、実時間性を担保した実践的な実現手法を教授する。

(松井茂)

20世紀後半のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディアを介してはかられる領域横断が、制度化された芸術諸分野を解体し、抵抗文化として、ラディカルな表現上の戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

(山田晃嗣)

安全・安心なネットワークというインフラと、情報の価値を高める分析手法を用いて、各ユーザーに個別対応するための一手段として情報技術を考える。そして、それらをどのように現場へ取り入れて行くべきかを福祉の視点で捉え、情報インフラ、情報分析と共に情報技術のあり方について教授する。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

メディア表現特別研究Ⅱ

担当:赤羽亨、大久保美紀、菅実花、小林孝浩、小林茂、鈴木宣也、鈴木悦久、飛谷謙介、萩原健一、平林真実、松井茂、山田晃嗣			
単位:2単位	履修対象:2年	履修区分:必修	授業形態:演習
学期:通年	実施方法:オンライン	教室:W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士論文・研究制作に関する指導をおこないながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数人体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

「メディア表現特別研究Ⅰ」の中で定められた研究テーマや研究計画に基づき実施した年次制作・研究、および提出された報告書の内容を踏まえ、年度末に開催する「中間審査発表会」での研究成果のプレゼンテーションに向けて、博士論文・研究制作を進める。そして、3年次に提出する博士論文・研究制作における高度な提案への結実を目指し、自らの研究・制作をより一層発展・深化させることを目標とする。

授業の概要

研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら「中間審査発表会」へ向けて、研究成果を取りまとめる。前期、その取りまとめに当たっては、指導教員らと研究・制作のテーマ、内容、実践手法等について定期的に報告・相談を行うとともに、1年次の「プロジェクト研究Ⅰ」と、2年次に並行して取り組む「プロジェクト研究Ⅱ」の経験と成果を反映させるため、必要に応じて「プロジェクト研究Ⅰ」および「プロジェクト研究Ⅱ」の担当教員と協議し行う。

その後は、年度末に開催する「中間審査発表会」へ向けて、研究成果としての中間発表を行い、さらに研究を深化させる。「中間審査発表会」での課題指摘や助言を踏まえて研究の改善を進め、博士課程最終学年である3年次への準備を整える。なお、主指導教員は、博士論文提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。

授業計画

- 第1回～第14回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
- 第15回中間審査発表会

指導教員の研究テーマは『メディア表現特別研究Ⅰ』を参照のこと。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

メディア表現特別研究Ⅲ

担当:赤羽亨・大久保美紀・菅実花・小林孝浩・小林茂・鈴木宣也・飛谷謙介・平林真実・松井茂・山田晃嗣			
単位:4単位	履修対象:3年	履修区分:必修	授業形態:演習
学期:通年	実施方法:オンライン	教室:W301 講義室	

授業の到達目標及びテーマ

博士論文・研究制作に関する指導をおこないながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数人体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

「メディア表現特別研究Ⅰ・Ⅱ」において実施した年次制作・研究、提出された報告書、中間審査発表会の内容・成果を踏まえて、後期の「博士論文予備審査会」、「博士論文審査会」へ向けて、博士論文・研究制作を進める。そして、自らの研究・制作を領域横断的視点から既存の価値観にとらわれない学術的・社会的に大きな価値を持つ博士論文として研究成果の結実を目標とする。

授業の概要

博士研究の最終年度として、博士論文を提出し、後期の「博士論文予備審査会」、「博士論文審査会」を通じた指導・助言に対応しながら、研究成果としてまとめる。

前期は、研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら、「博士論文予備審査会」に向けて、研究成果を取りまとめる。後期は、「博士論文審査会」に向けて、指導教員らによる定期的な指導のもと、博士論文を完成させる。併せて、研究制作を伴う場合は、同様に指導教員のもとで並行して制作を進める。履修者は、指導教員と定期的な報告・相談を行いながら、3年間の全ての授業の成果を持って博士論文を完成させ、審査・発表に臨む。

授業計画

- 第1回～第10回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
- 第11回～第14回博士論文の執筆、研究制作の進捗チェック
- 第15回博士論文予備審査会での発表
- 第16回～第19回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
- 第20回博士論文審査委員会への博士論文及び研究制作の準備

- 第21回～第24回博士論文の個別指導、定期的に進捗報告
- 第25回～第30回博士論文審査会に向けた最終調整

指導教員の研究テーマは『メディア表現特別研究Ⅰ』を参照のこと。

履修上の注意

主・副研究指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

教科書・参考書等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する。

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。